

本テキストの構成と使い方ー著者との Q&A ー

テキストの対象者

Q:このテキストは初級修了者を対象としているということですが。

A:そうですね。中でも、**知識と運用力のギャップ**の激しい人たちを想定しています。

Q:それは具体的に言うとうどういうことですか。

A:使役や受身、やりもらいなど、**基本的な文法や語彙は初級で既に学習したのに、いざ話したり書いたりすると**なると、それをなかなかうまく使いこなせない人たちのことです。そういう人たちは決して例外的な存在ではないと思います。

Q:というと？

A:つまり、知識と運用力のギャップというのは、**ほとんどの初級修了者に共通する問題**だということです。そのことは現場で教えている先生方が一番よくわかっているのではないのでしょうか。ただ、これまではいろいろ事情があって、「わかっているけど知識の詰め込みに走らざるを得ない」ということが多かったのではないのでしょうか。

Q:つまり、特に新しい問題ではないということですね。

A:そうです。実際、「知っているのに使えない」というのは、日本人の英語に対して、もう何十年も前から言われ続けていることでしょうか？ 私が一番いい例です（笑）。

テキストの全体構成

＜なぜトピック・シラバスか？＞

Q:では、「知っているのに使えない」のは何が原因なのでしょう。

A:一番の問題は、やはり現在の初級教育で広く行われている**項目積み上げ式の授業**にあると思います。これは、**文法シラバス**の問題と言い換えてもいいでしょう。

Q:項目積み上げ式の何が問題なのでしょうか？

A:ひとつは**思考の流れ**ですね。私たちが外国語を話す時には、まず伝えたいと思う事柄があって、それを表現するために「これまでに学習した文法や語彙をどう使えばいいか」と考えますよね。つまり、**伝達内容から表現形式へ**と考えを巡らすわけです。ところが、項目積み上げ式の授業では、まず文法や語彙について学習するところから授業を始めますから、そこで求められるのはそれとは全く逆の、**表現形式から伝達内容へ**という思考の流れです。授業で求められる思考の流れと、実際のコミュニケーション場面で求められる思考の流れがまったく逆なのですから、いざ話せと言われてもなかなか言葉が出てこないのも当然でしょう。

Q:しかし、みなさんタスクを取り入れるなどして、そうならないように努力されていると思うのですが。

A:ええ。確かにおっしゃるとおりです。ただ、**タスクもやり方次第**で、例えば授業で可能形について学習した後で「アルバイトの面接」という場面を与え、「何曜日に来られますか」とか「朝早く起きられますか」などと練習をしても、あまり効果はないと思います。なぜならば、学習者には「このタスクでは可能形を使って話せばいいのだ」ということが最初からわかっているからです。これでは表現形式から伝達内容へという思考の流れは変わりませんから、一見コミュニケーションの練習をしているようでも、実はパターン・プラクティスをしているのとあまり変わりません。

Q:となると、文法や語彙以外のものをシラバスの中心に据える必要があるということになりますね。

A:そうですね。ですから、このテキストでは**トピック・シラバス**を採用していて、学習者にまずなにかのトピックを与え、それについて話したり書いたりするためにどんな文法や語彙が必要かと考えてもらう構成になっています。**重要なのは、学習者が必要な文法や語彙を自分で選びだし、アレンジするというプロセスを経験する**ということです。

Q:なるほど。でも、それだけなら別にテキストのシラバスを変えなくても、教師が提示の仕方をちょっと工夫すれば十分なのではありませんか。

A:ところが、問題はそれほど簡単ではないのです。例えば、ある文法シラバスのテキストでは「～することができます」、「私の趣味は～することです」、「～する前に、～します」という三つの表現を同じ課で学習するようになっているのですが、この三つの表現を練習するためには、どのようなタスクを与えればいいかと考えてみると、これが意外に難題であることに気付きます。

Q:う～ん。そうですね…。確かに難しいですね。

A:なぜだかわかりますか。

Q:さあ。

A:それはこの三つの表現に意味的なつながりがほとんどないからです。あるのは、辞書形を使うという形の上でのつながりだけです。もともと形的に似ているというだけで選ばれた表現ですから、それをひとつの意味の塊であるタスクに組み込もうとしてもうまくいかないのは当然です。

Q:なるほど。

A:つまり、**文法シラバスは運用面よりも知識としての理解に重点を置いたシラバス**であると言えるわけで、これでは「知っているのに、使えない」という状態になるのも当然です。

Q:つまり、シラバス自体、意味的なつながりを重視したものでなければならないということですか。

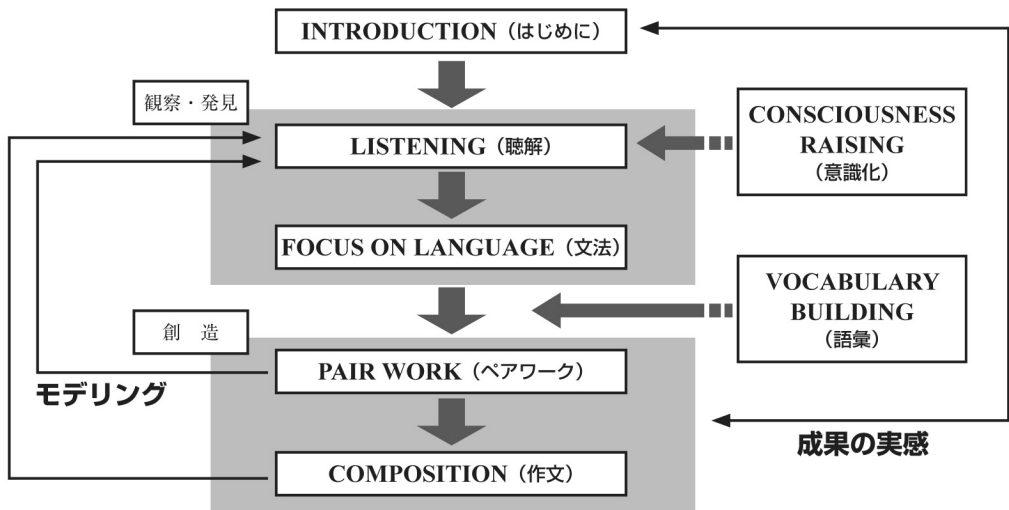
A:そういうことです。ですから、このテキストではトピック・シラバスを採用しました。

各課の構成

＜「観察」、「発見」、「創造」＞

Q:そのトピック・シラバスですが、具体的にどのような手順で教えたらいいのでしょうか。

A:それについては、こちらの図をご覧ください。これは各課の構成について示したものです。



Q:このような手順というか、構成にされたのは何か理由があるのですか。

A:ええ。実は**認知学習の理論**を参考にしています。

Q:に、認知学習の理論ですか？

A:いやいや、そんな大袈裟なものではありません。私が参考にしたのは、「**観察」「発見」「創造**」という**基本的な学習の流れ**だけです。いろいろ考えた結果、知識と運用力のギャップを埋めるためにはこの流れに沿って授業を進めるのが一番よいと判断したのです。

Q:「観察」、「発見」、「創造」ですか。

A:そうです。簡単に言えば、ただ教師の説明を聞いて理解するのではなく、**学習のポイント**を自分で**見つけ出し、理解できたと思ったら、それが本当かどうかを確認するために実際にやってみる**、ということです。このテキストの場合、〈聴解〉から〈文法〉までが「観察・発見」で、〈はじめに〉がその「前フリ」、〈ペアワーク〉と〈作文〉が「創造」に当たるのですが、具体的なことはテキストを見ながらお話しすることにしましょう。

Q:わかりました。

基本的な授業の流れ ＜到達目標と学習内容＞

A:まず、このテキストは全体が八つのトピックから構成され、それぞれ三つのステップに分かれています。ここでは、第3課のステップ1「フィリピンでの留学生活」を例にとって、お話ししたいと思います。

Q:はい。

A:このステップでは「日本に来てからの生活の変化」について話せるようになることを到達目標としています。このトピックを選んだのは、日本にいる外国人が日本人にもっともよく聞かれる質問のひとつが「日本はどう?」、「生活にはもう慣れた?」だろうと思ったからです。

Q:なるほど。

A:文法では可能形や変化の表現(「～ようになる」等)を取り上げ、語彙では日本に来たばかりの学生がときおり体験する「勉強が手につかない」や「食事が口に合わない」などを取り上げました。

Q:文法はともかくとして、語彙は結構難しそうですね。

A:ええ。このテキストでは、多少難しくとも、**トピックと関連のある語彙は積極的に取り上げるようにしています**。

＜意識化の重要性＞

Q:最初の〈はじめに〉は、ただ学習者に話させればいいのですか。

A:そうです。その際、気をつけなければならないことは、教師の方から文法や語彙に関する「余計な」指示は一切与えないということです。

Q:それはまたどうしてですか。

A:最初にも言いましたが、知識と運用力のギャップを埋めるためには、まず「表現形式から伝達内容へ」という思考の流れを変えなければなりません。そのためには、学習者がまず自分でやってみることで、そしてその結果、「自分に欠けているものは何か」、「どうすればもっとよくなるのか」といった点に**自分で気付くことが重要**だからです。

Q:教師が先に何か指示を与えてしまっては、思考の流れは変わらないということですね。

A:そういうことです。先ほど、この「はじめに」は「観察・発見」のための前フリであると言いましたが、それはここでうまく話せず、苦しめば苦しむほど、この後の〈聴解〉で学習のポイントがより強く**意識化**されるからです。

Q:なるほど。で、その〈聴解〉ですが、見たところ二つの課題で構成されているようですが。

A:そうです。ひとつは**内容把握**で、ここでは「フィリピンに留学した日本人の学生が日本にいる先生に手紙を書いた」という設定で、「最初はあれもこれもできなくて大変だったが、ようやくこちらでの生活に慣れた」という内容になっています。

Q:ふむ。

A:もうひとつは**ディクテーション**で、この後の〈文法〉で取り上げる可能形や変化の表現の使われている部分が空欄になっています。ただ正確に聞き取れたというだけで満足せず、次の**〈意識化〉**の質問にあるように、「手紙ではどんな文法や語彙がよく使われていたか」、「最初に自分が話した内容とモデル会話はどうか、どんなふうに話せばもっとよかったか」といった点に学習者の意識を向けさせるようにします。

Q:この〈聴解〉は後半の5課から8課ではところどころ**〈読解〉**になっているようですが…。

A:はい。でも、意識化を重視するという点は同じです。

Q:〈文法〉の扱い方は少し難しいですね。可能形も変化の表現も初級で一度学習していますから、普通の取り上げ方では学習者が興味を示さないかもしれませんし…。

A:そうなんです。ですから、ここで重要なことは、まず学習者に「自分ではわかっているつもりでいたが、実はそうではなかった」と気付いてもらうことです。

Q:文法も意識化するわけですね。

A:そうです。そして、そのために考えたのが、**質問に答えることで学習者自身に学習のポイントを発見させる**という方法です。本当にわかっているなら、ちゃんと答えられるはずですし、答えられなければ、まだ理解が十分でないということを学習者に気付かせることができるからです。

Q:〈語彙〉はどのように扱えばいいのですか。

A:これはその後に続く〈ペアワーク〉や〈作文〉で役立ちそうなものをまとめただけのいわば「インデックス」ですから、意味の確認程度でいいと思います。

＜繰り返すことの重要性＞

Q:さて、最後の「創造」にあたるところですが。

A:はい。ここで重要なことは**繰り返す**ということです。そのために、〈ペアワーク〉では、〈はじめに〉で話したのとほぼ同じ内容をもう一度話させるようにしてあります。「観察・発見」のところで学習したことを常に意識しながら、学習者自身が「このトピックについてはもう大丈夫」と思えるようになるまで、あるいは「一度目よりずいぶんうまく話せるようになった」と進歩を感じられるようになるまで、何度でも繰り返すようにします。

Q:そして、最後が〈作文〉ですね。

A:ここもやはり繰り返しです。穴埋め作文は〈聴解〉のモデル会話と同じような内容になっていますし、自由作文も〈ペアワーク〉で話したことをそのまま書けばいいようにしてあります。

Q:毎回作文を書くというのは、かなり大変なのではないですか。

A:最初から全部自分で書かなければならないとすれば、確かにそうでしょうね。でも、はじめはモデル会話や穴埋め作文をまねして書くだけでいいのです。初級を終えたばかりの学習者にとって、作文はもっとも訓練の不足しているスキルでしょう。ですから、まず「書く」という作業に慣れることが重要です。

Q：しかし、自分の考えを自分の言葉で書くというのも重要なことだと思いますが。

A：もちろんです。でも、それと同じように適切な表現を使い、適切なスタイルで書くというのも重要なはずです。最初から二兎を追うのではなく、書くことに慣れてきたところで、徐々に自分のオリジナリティーを出すようにしてもらえば、それでいいのです。

Q：なるほど。

終わりに

A：どうでしょうか。テキストの構成と使い方について、ある程度おわかりいただけたでしょうか。

Q：はあ。正直に言うと、なんとなくですが。

A：それで、十分です。特に項目積み上げ式の授業に慣れた方には、最初は少しとっつきにくいかもしれませんが、でも、それも最初のうちだけです。慣れればすぐにこのテキストのよさがわかってもらえるはずですし、そうあってほしいと思っています。